

懐かしい未来新聞

11月8日・9日に、「生活困窮者自立支援全国研究交流大会」がびわ湖ホールおよび龍谷大学において開催され、本市からも行政職員、市社会福祉協議会職員等13名が参加しました。

また10月17日には、滋賀県立大学で開催された近江環人「地域再生学」講座に登壇しました。この他にも兵庫県朝来市、神奈川県厚木市から、講義・アドバイザーの依頼を受け、本市の取組みを紹介しながら情報交換を行いました。こうした交流は、本市の取組みを発信するのみならず、事業を振り返りブラッシュアップにつながる機会となりました。

生活困窮者自立支援全国研究交流大会

2日間の研究大会では、子ども・若者の困窮や身寄りのない方への支援などをテーマに、有識者や全国の関係者が集まりました。

2日目の分科会では、地域共生社会推進課の中井係長がプレゼンターとして登壇しました。

総括では、滋賀県の大会事務局で元野洲市職員 生水裕美氏の進行のもと、奥田知志氏（『ミコ』法人抱撲理事）、原田正樹氏（日本福祉大学 学長）、楠木奈津子氏（上智大学 准教授）による議論が交わされました。

今大会の要点

- ①「孤立」への対応と「越境」の必要性：生活困窮者支援の核心は「孤立」への対応であり、断らない（関係を切り続けたい）姿勢が重要である。今後は、他分野と連携する「横への越境」と、家族機能など制度の手前の領域に踏み込む「手前への越境」が求められる。
- ②制度から運動へ：地域共生社会の実現や生活困窮者支援は、制度導入に留まらず、社会の分断や排除に対抗し、人間社会への信頼を再構築するための「社会運動」としての役割を担うべきである。
- ③現場の力の転換：支援現場は社会の課題をいち早く察知する「リーダー機能」を持つが、その発見を社会全体の仕組みや地域を変える具体的な力へと転換していくプロセスが今後の重要な課題である。
- ④AI時代の支援者育成：今後の支援者育成では、知識の提供はAIに任せ、人間はAIに代替不可能な「人の心がわかる教養」を深めることに注力すべきである。

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

本号の内容
・エリア越境で公助力を磨く
・複線人生のすゝめ
・重層物語 スイートメモリーズ 5

生活困窮者自立支援全国研究交流大会とは

生活困窮者自立支援制度や包括的支援体制づくりに関する行政・社会福祉協議会、民間事業所などが、日々の取組みを通して感じる困難ややりがい共有し、事業や制度を検証しながら支援を前に進めるための場となっています。一般社団法人生活困窮者自立支援全国ネットワークが実施主体となり、厚生労働省の委託事業として今回で12回目の開催。



①1日目全体集会の様子②2日目分科会の中井係長登壇の様子③『ミコ』法人の住民会議の推薦者である永田祐先生（前列中央）と共に④大懇親会では奥田知志先生（後列左から2人目）と共に

複線人生のすゝめ

市民活動推進課

なかじまゆうや

役所魂は役者魂！中嶋裕也さん



少し照れますが、地元で働いてほしいという祖父の期待に応えて市役所に就職しました。今、地域づくりに携わりながら、ミュージカルで学んだことが参考になっています。

小学生の時、『甲賀文化輝き』の第1期生として劇団に入りました。離れていた時期もありましたが、市役所に入ってから再び舞台に立ち、スポットライトを浴びて役を生きました。ミュージカルはみんなで作るものです。裏方を含めてみんなで。

そこが最高に面白い。

幼かった僕は、劇団の中でたくさんの大人たちに許されてきました。暮らしの中にミュージカルという地域と僕をつなぐ居場所があったのです。

まる一むには多くの人が集まっていますが、それだけではもったいない、「人」と「人」との関係性が生まれることが大切だと思います。

そのためなら、僕は表舞台にも立っし、裏方だってこなします。

あえて照れずに言います。僕は、イベントや非日常ではなく、いつもの暮らしの中で生まれる関係づくりをみんなと一緒にやりたい。



2014年上演「青い目の人形」より

おふみかんじん 滋賀県立大学「地域再生学特論」

10月17日、滋賀県立大学において、近江環人受講者を対象として、近江環人のメンバーであり本市在住の山本尚路さんと共に、本市の地域共生社会推進課の桑山主査と山口主査が講座を担当しました。

この講座では、山本さんらと共に行政と市民が協働して創り上げ、本年7月〜8月に実施した若者講座での取組みを中心に話しました。

対話の積み重ねとプロセスの大切さ、グラデーションで先生（後列左端）と近江環人の仲間



重層物語

スウィート・メモリーズ 5

十一月十五日、夜の九時半、校邸。

松田民生委員、大村自治会長、そして肩を太く描いた私は、透子さんにダイニングへと案内された。ビニール製のクロスがかかった四人掛けのテーブルには、既に一人の男が背を向けて座っており、ノートパソコンを叩いている。

「おや、先客がいらつしやるようで」

松田さんがどこか遠慮がちに透子さんに尋ねた。

その声に気が付いた男は、首をひねるように振り向き、不機嫌そうな顔をして言った。

「鳥井です。妻に急用ができて、代わりに僕がこのよく分からない案件に巻き込まれる事になりました」

透子さんの嬉にあたる鳥井の皮肉めいた自己紹介に対して、松田さんも大村さんも言い返すどころか共感を示すような態度で席に着いた。

「こんなことに付き合わせちゃって申し訳ないねえ。でもこぼ一つ、彼のためだと思つてよろしく頼むよ。それじゃあさつそく、これからの段取りを説明させてもらおうじゃないか」

大村さんは私の肩を叩きながら言った。

私は、ある程度の無茶ぶりにはずすつもりで慣れていたが、それでも確認せずにはいられないことが一つあった。

「あのう、今から実施するプランについてですが、透子さんを交えて説明してもよいものでしょうか？」

丁度、透子さんが台所に立っているタイミングだった。

「かまへんで。もうご存じのことやから、本人さん抜きにやるもんでもないやろ」

当然のことのように松田さんは答えた。

「ですが、二十三世に幻覚症状が現れるとか、ご主人の成り代わりとして私が登場する件について、何とかネタバレが過ぎませんか」

「北島君、それはネタじゃないんだよ、解決へと導くタネなんだよ」

大村さんが自信たっぷりに言った。

「いや、そういうことではなくて。ちゃんとやりましょうよ」

私は諦めずバストを尽くす覚悟で訴えたが、松田さんも大村さんもどこか上の空で、懐かし気に部屋の様子をぼんやりと眺めている。

「でも、おまじいさま」

そう言って、お盆片手に透子さんが瓶ビール二本とグラス四つ、それにおつまみを手際よくテーブルに置いていく。

「お義母さん。申し訳ありませんが、僕は忙しいんです。用事が済んだらすぐ帰りますから」

鳥井は、ボタンとノートパソコンを閉じて、そう言った。

白黒はつきりさせる付き合い方には、愛想はないが、かつての自分を思わせるどこかもあり親しみが湧く。

「明日は日曜日なんだから。今日は泊まって行きなさい」

婿に対してきつぱりと言った透子さんは、普段より若く感じられた。

「いや、でもなあ」

「あにさんよう、つべこべ言わんと。たまには仕事から離れなあきませんで。ほれ」

そう言って、松田さんが鳥井のグラスにビールを注いだ。

「北島君、台所から丸椅子を持ってきてくれないか。透子さんの席がないじゃないか。もちろんグラスも忘れないでくれよ」

すかさず言った大村さんを見て、在りし日の男っぷりや気回しが目に浮かぶやうだった。

午後一〇時前。

透子さん、婿の鳥井、松田民生委員、大村自治会長、そして私。縁があるような全くないような五人の宴会が始まった。

考えてみれば不思議なことだらけだった。私の太い肩にも大村さんのどこかいラジカセにも話題が向かないし、毎晩幻覚症状があるらしい透子さんのてきぱきとした身のこなしを疑問視する声も出ない。あんなにノリの悪かった鳥井もいつしか仕事の愚痴をこぼし始めている。

「すぐ隣にある家の中は、まったくの異世界だ」

酔えないでいるのは私だけなのか、それとも私一人が酔っているのか。私の持つどろりとした違和感とはとても孤独だった。

異世界だと感じるのは、この隣家に初めて入ったのだから当然かもしれない。分厚い玄関マット、木目調の壁に貼られた家族写真、ガラスケースのセルロイド人形、電話台に置かれた筆記用具とメモ帳、大ぶりの電化製品と家具、ファンヒーターの石油の匂い。ある時期を境に時間が止まっているかのようだった。

夢とも現実ともつかぬ狭間で、目の前の四人をまじまじと見つめる。

（私は、なぜここで、この人たちと酒を飲んでるのか……）

より一層夢の方へと引きずり込まれそうになる。松田プランなんて最初からなかったんじゃないか。そもそも毎晩幻聴を聞いていたのは私だったのかもしれない。もう何もかもがどうでもよくなったその時。

「北島君、もうすぐ五分前や。スタンバイしてや」

腕時計を見ながら、松田さんが言った。

「えつ、はい。分かりました」

私は、松田さんの指示に慌てて返事をした。



いまさら何を隠すこともないが、私はこっそりとその場を離れ、四つん這いになって薄暗かりの階段を上がついていき、狭い二階の廊下に身を潜めた。毎晩声が聞こえてきた隣家の小窓が、すべ頭上にある。確かめるようにこちらから我が家をのぞくと、四角いすりガラスに正面を向いた人影が一瞬見えた。反射的に腰を屈める。

考える余裕がない、すぐ二十三世になる。ついさっきまでやかましく聞こえていた一階からの騒ぎ声がピタリと止んでいる。嫌な汗が背中をすたう。携帯の光が漏れぬように手でかばうようにして時間を確かめる。

（時間だ）

階段の電気が点いて、一階から足音が迫ってくる。分かっている、透子さんだろう。透子さん以外は、ひんやりと冷気が流れる、どこかの窓が開いているのか、金木犀の匂いがする。階段の方を体に向けて中腰で待つ私の背後から、背広姿の男性が音もなく通り過ぎた。そこに階段を上がりきった透子さんがやってきて、その男性と鉢合わせた。

バックナンバーはこちらから↓

